

Robert N. Bellah,
Religion in Human Evolution
From the Paleolithic to the Axial Age

The Belknap Press of Harvard University Press, 2011. xxvii+746pages, \$39.95

寺田 光之

本書は、宗教社会学の大家ロバート・ベラーによる宗教進化論（宗教類型論）を論じた著作である。宗教進化論は、理神論に由来する自然的宗教の探求から重要な影響を受けながら誕生し、ダーウィンの進化論のインパクトに乗って大きく発展した理論である。またそれは、様々な宗教を歴史上に段階的に配列して宗教を人間精神に普遍的なものとして措定しようとし、更にはその図式を抽象的な人間の発展段階を表すものとして理解しようとした試みでもある。諸宗教の分類による学問的分析の進展といったメリットのために宗教進化論の枠組が受け継がれている例もある（宗教社会学、特に世俗化論における発展図式の利用など）ものの、諸宗教を序列化する際に研究者の主観性（規範的次元）が常に含まれうるというデメリットのために、概して言えば、宗教進化論は今日その枠組に沿って主張が展開されることは少ないテーマであるといえる⁽¹⁾。しかし、そのような問題も多いテーマをベラーほどの学者があえて真正面から扱うということは、その論が単なる宗教学史の確認に留まらない魅力を持っていることが期待され、それゆえ本書を書評の対象として選んだ次第である。

本稿では、1.本書の構成を示し、2.各章の内容を概観した後、3.本書が持つ性格の理解の助けになると思われる、ベラー自身が60年代に著した宗教進化論の枠組を提示し、4.60年代のものとの比較を通じて本書全体の意味について考えるという四点を行なってみたい。

1. 本書の構成

本書の構成は以下の通りである。

Preface

Acknowledgments

1. Religion and Reality

2. Religion and Evolution

3. Tribal Religion: The Production of Meaning

4. From Tribal to Archaic Religion

5. Archaic Religion: God and King

- 6. The Axial Age I : Introduction and Ancient Israel
- 7. The Axial Age II : Ancient Greece
- 8. The Axial Age III : China in the Late First Millennium BCE
- 9. The Axial Age IV : Ancient India
- 10. Conclusion
- Notes
- Index

2. 各章の内容

序文においては、本書の目的がおおまかに説明されている。本書の目的は、互いに関連するものではあるが、二つあるといえる。一つは宗教進化論を提示することである。本書はドイツの小説家トーマス・マンの「過去という井戸は深い」という言葉をエピグラフに始まっているが、今日においては歴史を区分することが難しく、歴史について考えようとする無限に過去へと遡ってしまいがちな状況がある。例えば自然科学のデータによれば人間とチンパンジーは DNA の 9 割以上を同じくする存在であるが、この事実を鑑みると人類史をホモ・サピエンスや類人猿以降のものと区分してしまうことは妥当ではないように考えられ、人類の起源などを考えようとする生物史を生命の発生まで遡ってしまうような事態がある。しかし著者は、宗教については類型があり、宗教の各々のタイプは進化史的秩序の上に並べることができると信じており、その確信が多く具体例を引きながら示されることになる。もう一つは、(ヤスパースの唱えた) 枢軸時代およびそこに至るまでの諸時代についての一貫性のある説明を提示することである。現代を第二の枢軸時代と称し新たな文化的形態が生まれつつあると主張する人があるが、この意見に対して著者は否定的である。現代は新時代であると見なしてしまうのは全人類の精神的基盤を為す枢軸時代の解釈の混乱に起因するものであって、枢軸時代をうまく捉えられない危機をそれについての統合的説明を再び提示することによって解決することがこれから試みられることになる。

第一章「宗教と実在」においては、著者が「宗教」と言う場合、その語が何を示しているのかという定義とその宗教がどのように表れてくるのかという表象様式が示されている。宗教の定義としては、著者はデュルケムの「宗教とは、倫理的共同体においてそれを信奉する人々を統合する聖なるものに関する信念と実践の体系である」というものを取る。そして、その定義において根幹的な「聖なるもの」、つまりは「他からは区別されていたり禁じられているもの、ひいては非日常的な実在 **reality** の領域」という部分を理解するために、その内容を主にアルフレッド・シュッツの「多数の実在」という考えによって説明している。近代以降の時代において、人々にとって本当にリアルなものとは現実の日常的世界 **daily life** のみであるように思えるが、「日常世界こそが唯一・第一の実在である」という見方は努めて社会的に構成されたものであり、絶対的なものではない。例えば、眠って夢を見ているときやサッカー観戦などに熱中しているとき、我々は日常の理屈が通用しない別の世界 **other world** の地点に立っている。人間には(日常的世界もその内のひとつであるのだが)それぞれの論理で動く諸体系、すなわち多数の実在が存在している。そして、その実在の中で、認識・行為などが他の目的のための手段ではなく、それ自身が目

的となるようなものを宗教的実在とする。宗教の表象方法としては、著者は主にジェローム・ブルーナーやジャン・ピアジェなどの教育心理学の知見を取り入れて、統合的 *unitive*・上演的 *enactive*・象徴的 *symbolic*・概念的 *conceptual* の四つを、思考発達段階説と照応させながら、挙げている。統合的表象は主客未分のものとして表される宗教経験で、人間の思考の発達段階においては感覚運動期に当たるものである。デュルケムの言う集合的沸騰が良い例で、個々人がどのようにその経験の意味を汲み取るかという類の経験ではなく、経験に参加している者全てに圧倒的な実在が現前するような経験をもたらすものである。上演的表象は実際に身体を用いて具体化される宗教経験である。前操作期に当たる経験で、他のものを真似して表現したり、他の行為の原型となる行為を表したりする。象徴的表象は文字通り象徴が用いられる宗教経験である。ピアジェの言う「自己中心的」発想に基づくものであり、表象の置かれた時間・場所・文脈などといった具体性から切り離して理解することのできないものである。アイコン・音楽・詩などの形で表される。概念的表象は具体的な文脈から切り離して考えることのできる抽象的・普遍的な経験（思考）で、(形式的)操作期に当たるものである。全体としての一貫性を持ち、例えば詩がまさにその言葉でしか表現として成り立たないのとは対照的に、他の表現・形式への変換が可能である。この四つの表象様式は、前の段階を後の段階が取って代わるような単線進化的あり方ではなく、前の段階に後の段階が加わる重層的なあり方をしている。

第二章「宗教と進化」においては、(ホモ・サピエンスに至る以前の他の種までを射程に入れた)より早期の宗教の発展段階(宗教前史)について理解するために、今日的人类社会から遡れる限りのすべての歴史、すなわちビックバン以降の宇宙論と単細胞生物以来の進化史が提示される。ここでは特に重点が置かれている進化史の方を取り上げる。著者は、古生物・進化生物学者ステイブン・グールドの「生物学的進化は何よりも、複雑性へというよりはむしろ、多様性へと向けた傾向のことである」という主張を引用しつつ、細胞生物学者のマーク・キルシュナーとジョン・ゲーアハルトによる「原核生物の時代、多細胞・真核生物の時代、体制(生物体の構造の基本的、一般的な形式)を持つ生物の時代」という三段階の進化史を紹介する。この歴史は新しい可能性 *capacity* 獲得の歴史であり、前の段階に後の段階が優越しているというわけでは決してない。ヒトに直接関係する新しい可能性を開花させる原因としては特に親による養育と遊びの二つを強調している。ヒトのように誕生時はひ弱で自分で自分の身を守ることのできない晩成性の生物には親の養育が必須となるが、親子という根本的な社会的関係を取り結ぶことによって「相手は何を考えているか」を理解する感情移入が可能となり、これが倫理や宗教などといったあらゆる社会的紐帯にとっての絶対的基礎の一つとなった。また、親による養育によって子供は生存闘争から解放されるが、生存のための必要性から解放された領域において退屈を回避するために(あるいは動物に遍在しているように見える攻撃性をうまく処理するために)①非機能的で、自発的に行われ、楽しく②自己目的的で③そこでの行動が日常における行動とは異なる意味を持ち④反復的で⑤様々な抑圧条件から解放されている時に行われるという特徴を持つ遊び *play* が発展する。そして遊びは a.自分の動きそのものを重視する形式 b.ものを用いて表される形式 c.ごっこ遊びのように参加者各自の役割や遊びの全体像が存在する社会的な形式の三つの形で表れる。著者は特に遊びを儀礼に連なる宗教の本質・起源の一つとして非常に重視する。

第三章以降は人類の宗教の発展が述べられる。その大枠としては心理・行動生物学者のマーリン・ドナルドを引用して、模倣的 *mimetic* -神話的 *mythic*-理論的 *theoretic* 文化という三段階の発展図式で説明する。模倣的文化は言語の発達以前、行為による表象が主たる段階であり、(現在のもの、過去のものを問わず) 事例を具体化したり他者と意思疎通を図るための身体の利用が広く見られる。模倣文化以前の動物の段階では各個体の経験が外部に表出されて共有されることがないのに対し、模倣文化は個人の経験を身体を用いて表現することで他者とのコミュニケーションが可能になる。神話的文化は言語の発達した口承文化の段階である。模倣的文化が個々の事例を再構成するにとどまるのに対し、人間が属する宇宙全体の包括的なモデル化を集団全員に把握された統一的で説明的、恒常的な比喻によって行う。理論的文化は文字(書き言葉)の発展した段階である。神話的文化が物語の文脈に依存する比喻を用いて世界の説明を行うのに対し、理論的文化は文脈から自由な事実にもとづいて結論を導く思考、および実用的・場当たりの科学を越えた「思索のための思索を行う」という態度によって世界を説明しようとする。

第三・四章「部族宗教：意味の産出」「部族宗教から古代宗教へ：意味と力」においては、人類の進化において宗教がどのように出現してきたかという宗教最初期の様態および部族宗教がその次の段階である古代宗教へ移行していく過渡期について、カラパロ族・アボリジニ・ワルブリ族・ポリネシア(ティコピア・ハワイなど)の例を引きながら、示される。部族的と区分される社会では主に、社会形態としては狩猟採集が、支配構造としては平等主義がしかれる(ここでいう平等主義とは、支配が存在しない状態ではなく、生物に本来ある支配への欲求・傾向をそのままにしておくことから生じる損失(他者からの支配や配偶者の偏在など)を避けるために、共同体内での格差を禁じるという戦略であり、支配構造のひとつとされる)。そこにおける宗教は儀礼や神話が共同体の結束を高めるものとして非常に重要な役割を果たす。部族宗教における儀礼・神話は何よりも行為(に関わるもの)である。音楽や舞踊などの実践を含む儀礼はもちろんのこと、祖先からの教えなどの形で共同体の行動規範となる神話も行為に深く関わるものである。その行為に共同体の全成員が平等に参加することによって共同体の団結が維持・強化されるのである。この段階の宗教には神の観念やその解釈を独占する聖職者などの特権的地位はなく、共同体に属する人はみな等しく「力あるもの」*powerful being* という超自然的存在を奉ずるのが一般的であった。このような社会・宗教の一部には、社会の大規模化にともなう変容し、首長制社会という(部族社会から次の段階・古代社会への)過渡期の形態を取るものもあった。そもそも、平等主義を取る部族社会においても養育する者とされる者間にはゆるやかではあるが力関係が存在する。例えば親は子供に食物や安全を与えて保護することに正統性を得て、子供を指導(支配)する。この親権的支配とも言うべきものが、社会の拡大を通じて共同体全体へと拡大することがある。すなわち、個々の世帯が独立に活動することでは生き延びられず労働力を集約させねばならないような環境においては、労働の指導や公共の食物供給などといった集合的善の達成のための指導者が必要となるし、戦争が多発する地域では戦闘におけるリーダーが必須である。共同体の利益のために(臨時に、その代限りでの)指導者が現れ共同体の成員間に権力差が生じることは部族社会にもありえるが、指導者の地位が世襲などによって固定されるようになるとその社会は首長制社会の色彩を帯びるようになる。その社会では、本来は共同体に属する人全てに関係し、

それへの参加によって互いの結束を確かめ合うものだった儀礼・神話は首長の権威や権力を演出するものへと変容した。またそのような宗教においては、支配階級の地位を正統化するための神概念やその神概念の解釈・儀礼の組織など宗教に関わる事項を専門に取り扱う聖職者階級などといった古代宗教の要素が萌芽的に発生した。

第五章「古代宗教：神と王」においては、いわゆる古代王国や古代文明が栄え、枢軸時代の前に位置する古代における宗教について、四大文明としても有名なメソポタミア・エジプト・中国の例を引いて、示される。古代社会とは、人類学者のブルース・トリガーらによれば、基本的・主要な社会の統治関係が血縁ではなく（土農工商のような安定的）階層となり、権力や富・社会的特権が偏在している社会であり、地位や階級が分化していて支配-被支配の関係が明確な社会形態と支配構造としての王政を特徴に持つ。このような古代社会の統治体制はその成立当初は不安定なものであった。何らかの機会を得た個人（戦時における傑出した戦士など）がカリスマ的指導者としての位置と支持者を得、それを利用して社会の支配構造を平等主義から一人（少数）がその他多数を支配するものへと変えることによって古代社会における支配は始まったのだが、この体制は支持者集団の内部分裂による崩壊の危険性などといった弱点を孕んでいた。少数による多数の支配という構造を安定させるためにそのあり方を支持する権威や階層が必要とされ、そこから王権 kingship と神 god, divinity が生まれた。そして、この（王権と関連した）神概念の出現こそ古代宗教の大きな特徴なのである。王は唯一自分のみが社会を支配することができ、また社会と神との関係を維持することができると考え、自身を神やそれに準ずるものと称し、彼のみが正しい儀礼を行えるとした。しかしこれは神と人との関係についての説明の一つであり、支配者が望むもの以外の解釈もありえた。それゆえ、支配を安定させる神概念やその説明を組織・徹底させることは古代王国永遠の課題となり、多くの古代王国は神・人・自然全てを統合するような広大で複雑な宇宙論を展開した。その中には（特に古代社会の成熟期以降）正義などに依拠した倫理的な正統化も存在した。しかし、何らかの理想状態を支配の正当性として説明することは、その理想のあり方から現実の王権が逸脱している場合、逆に王による統治の正統性を問い直す糸口ともなった。例えば、統治を行うにあたって「王は民を安んずる」という倫理的根拠を正統性として掲げる体制では、その王が実際には苛政をしいている場合、人民は現状の王の支配に正統性がないとして批判を突きつける。そして、まさにこの現体制への批判の視角から次の段階である枢軸時代の宗教が生まれてくるのである。

第六～九章「枢軸時代Ⅰ：導入と古代イスラエル」「枢軸時代Ⅱ：古代ギリシャ」「枢軸時代Ⅲ：紀元前千年紀後半における中国」「枢軸時代Ⅳ：古代インド」においては、文字通り枢軸時代における各地域の宗教が示される。枢軸時代とはヤスパースが唱えた概念で、年代にして言えば紀元前 800 年から紀元前 200 年頃に当たり、今日の間人精神・文化の基盤を為すような思想がこの時代に活躍した思想家（孔子、ブッダ、ユダヤの預言者やギリシャの哲学者など）によって生み出され、紀元前 500 年頃を境として世界各地で人類精神史上の大変革があったとする考え方である。社会形態や支配構造は古代社会のそれと同じだが、時代を変えた思想家たちは支配の安定した大帝国の中心部からではなく、万人の万人に対する闘争が地で行われているような小国・都市から出現し、しかも世捨て人 renouncer のように社会的地位を持たなかった。古代社会では概して、

社会階層が成立して中央集権的政治権力が出現し、強制労働などを組織して軍事力の拡大や経済的開発を進めることによって領地内の平和や農業生産力の向上、広域貿易の発展などが目指される。これらの目標は規模の大きな大帝国では達成されその支配の安定化へとつながったが、小国においては必ずしも達成されないばかりか金属貨幣の流通や戦争の頻発などの事態によって血縁関係に基づく伝統的な紐帯が崩壊するといった社会の流動化が進んだ。このように支配の正統性が失われた不安定な社会では、現実の政治的権力や現世的秩序を批判し criticism 社会を再構成するほどの可能性を秘めた超越的なビジョンを提示するような新しい知的運動が生まれた。既存の体制を批判し、その代わりとなる理想のあり方を提示するという潮流は、思考する際の前提を問い直し、より根本的・普遍的な原理を探求する態度、言い換えれば「思索それ自身のための思索」「理論文化」（ともにマーリン・ドナルド）という新しい思考のモードの登場を意味し、これは今日我々の思考法にも通ずるものであり、また枢軸時代を特徴づける最大の要素である。

第十章「結論」においては、本書における著者の主張が要約されている。本文の概要は上にすでに述べたので繰り返さないが、ここでは筆者が本章で特に強調している二つの点を取り上げた。一つは遊びの重要性である。遊びは、広くホ乳類などの動物に見られ、親の養育によって子が生存闘争の必要性から解放されるところに生ずる自己目的的な行動であるが、これがすべての宗教の背景を為すものなのである。生存闘争からの解放という条件は、儀礼をとり行うには十分な余剰食物が不可欠となり、流浪の大思想家が思索を行い、その考えを世に広め実現していくには支持者からの布施が必要である点に当てはまり、また自己目的的という性格は、行為が他の目的のための手段となる日常的世界とは異なり宗教の領域では儀礼を行ったり、宇宙論を展開したり、普遍的倫理や価値を求めると自体が目的となるという点に当てはまるのであり、遊びのあり方は部族・古代・枢軸時代のどの宗教の様態にも合致する。それゆえ、遊びは宗教にとって非常に本質的な要素と言える。もう一つは勝利主義史観 triumphalism の否定である。特に西洋人は陥りやすいことであるが、歴史の見方として、どのような社会・文化も最終的にはただ一つの正しい・理想のあり方に帰着するといったタイプの普遍主義的歴史観がとられることがある。しかし、これは極端な二分法（自己-他者、時間的前-後など）を基調とする発想で、対立関係を優劣関係と結びつけ、果てには現在・自分（の社会や文化）が最も優れているという傲慢な考えに至りやすい。これに対し著者は、マーリン・ドナルドなどを引用しながら、前の段階と新たな段階が原理的に対立し前者が後者に完全に取って代わられるという見方ではなく、後の時代が前の時代の要素を受け継ぎながら新たな可能性を発現させていくという統合的な歴史観を取り、また各段階の内部においては多様な事例があることを示すことによって、一つの立場のみが正しいというエスノセントリックな観点から脱却している。

3. 『宗教の進化』における枠組

著者は本書を発行する以前にも、1964年に発表された『宗教の進化』⁽²⁾という論文において宗教進化論について論じている。この論文は本書を読む上で参考になると考えられるのでその枠組を本節で提示したい。

本論文は、宗教には進化の段階がありその段階が進むにつれ人格と社会の自由度が増大したと

いう著者の命題を証明するために提示された宗教の発展段階についての図式的説明である。進化を複雑性の増大する過程、宗教を人間とそれが存在するための窮極的条件とを関係付ける象徴的な形態・行為と定義した上で、宗教を象徴体系・宗教行動・宗教組織・社会的意味合いの四つの観点から分析し、宗教進化の段階として原始・古代・有史・初期近代・現代の五つを示す。以下に各段階における宗教の説明を述べる。

原始宗教は、環境条件などの制約を受動的に耐えることしかできない動物とは異なり象徴化の能力をもって条件を超越し支配することができるようになった人間にとって最初の宗教であり、具体例としてはアボリジニの宗教があげられる。象徴体系としては、模範的人間（英雄）が描かれた神話を持つ。また、宗教行動としては儀式を持つ。儀式には社会の成員全員が参加し、神話的存在との一体化を演じきる。宗教組織は、社会内において他の部分から独立した機関としては見出されない。社会的意味合いについては、デュルケムの言うように儀式を通じて社会的連帯が強化されるというところに原始宗教の原始社会に対する意味がある。

古代宗教は、神や聖職者、礼拝、犠牲などを伴う信仰の出現に特徴づけられ、アフリカ、ポリネシアの大部分、新世界の一部、古代中東、インド、中国など世界各地における最も初期の宗教体系がこれに当てはまる。宗教的象徴としては神を持つ。原始宗教の神話的存在がより客体化され、自然や人間に対して大きな力を持つだけではなく人間がそれに何らかの対処を行わなければならないと考えられるようになるに至って神の概念が出現した。古代宗教の中にはこの神概念を中心に非常に広大な宇宙論を展開するものもあった。宗教行動としては礼拝、犠牲（供犠）を持つ。人と神が分離されることによって神に対して何かを行うという礼拝が出現した。宗教組織としては、未だ明確に独立した機関は持たないが、聖職者などといった宗教に携わる集団の機能的・階層的分化が進んだ。宗教的意味合いは根本的には原始宗教のそれと同じで、社会秩序の正統化と補強である。しかし、原始宗教が神話即現実世界として強固な一元的世界観を提示するのに対して、古代宗教は神が分離されたことによって世界観解釈の自由度が上がったといえる。

有史宗教は、考古学や民俗学と言うよりはむしろ歴史学によって探求されるものであり、現実世界に対して超越的であるという特徴を持つ。具体的にはユダヤ教、キリスト教、イスラム教・仏教が当てはまる。象徴体系としては、現世を超越した次元を想定する宇宙二元論を持つ。（現世とは根本的に異なる）死後の世界が関心事となり、救済の問題が宗教において説かれるようになるのはこの時期からである。現世と完全に切り離された領域を創出し、それとの関係において人間を捉えるようになったことは、（環境・社会的制約に不可避に囚われた古代以前の人間理解ではなく）人間そのものの把握を可能にした。宗教行動としては、形態としては礼拝や犠牲の特徴を残すが、それらの行動に救済という新たな意味付けが行われた。宗教組織としては、（二元的世界観の出現も原因となって）政治や経済などといった社会領域の分化が進んだことによって、宗教や文化に専門的に関わる階層が出現し、その階層出身の宗教的エリートが篤信者を組織するということが行われた。社会的意味合いとしては、宗教領域が政治領域の統御しきれないものとしての位置を獲得したことによって、宗教をイデオロギーとして現状の体制への対抗や改革運動が可能となった。

初期近代宗教は、宗教改革を通じて誕生したプロテスタントをモデルとする宗教で、二元論の

発展的崩壊（古代以前の一元論への回帰ではなく、有史宗教の問題性を批判した上で新しい形の一元論へと移行すること）を特徴とする。象徴体系としては、個人と超越的現実を直接的に関係させる解釈を持つ。宗教行動としては、儀礼のみを宗教行動として重視するのではなく、生活におけるすべての行動を宗教的行動と見なし重視するようになった。宗教組織としては、階層制を放棄した。社会的意味合いとしては、宗教的熱情が現世内へと向けられることによって、宗教的価値の現実的実現が可能となった。民主主義的社会に見られる自己修正的な社会秩序は初期近代宗教の所産の一つといえる。

現代宗教は、確定的な時期区分とはまだ言えないが少なくとも有史宗教からは区別される特徴があるとされる。象徴体系としては、象徴化そのものを分析することを通じて、二重の世界という二元論的世界観から無限に多層的な世界観へと移行した。宗教行動としては、初期近代宗教から連続している。宗教行動は教会の範囲に留まるものではなく、生活上のすべての行動について言える。宗教組織としては、教会などの組織が全く無くなってしまわないが、その形態はますます流動的になっていくと考えられている。社会的意味合いとしては、象徴の無限性や行動組織の流動性によって文化や人格が無限に修正可能となった。

4. 本書の意味

本書と『宗教の進化』論文を比較すると、当然ながら共通点と相違点の双方が存在している。これらを見ることを通じて本書が持つ意味について考えてみたい。

共通点としては、両者が扱う時代のうち重なっている部分についての説明内容がほとんど同じことが挙げられる。取り扱う歴史年代としては、本書における部族宗教から枢軸時代の宗教までと『宗教の進化』論文の原始宗教から有史宗教までが重複しているが、この三つの各段階についての説明はほとんど変わらない。これは、宗教進化の理論としては本書と『宗教の進化』が本質的に同一のものであることを示している。『宗教の進化』論文が世に出てから本書が発行されるまで半世紀弱の間に、宗教進化論自体への批判のみならず著者の宗教進化論に対する批判も存在したはずだが、これを受けた上で著者の論の性質が根本的には変わっていないとすれば、本書における説明がこれまでの宗教進化論批判者たちすら納得させるものになっているのかどうかは疑問が残る。本書が提示した宗教進化論が実際にどれほどの妥当性を持つのかについては多くの議論を待つ必要があるだろう。

他方、相違点としては、本書には『宗教の進化』論文では全く触れられていなかった自然科学系の学者の主張が多く引用されていることが挙げられる。マーリン・ドナルドを引用して、遊びの重要性を説き、また人間以前の段階を加えるとともに部族宗教以降の人間宗教の発展段階を「模倣-神話-理論」という三段階図式を交えて説明したのはその最たるものである。これについて一つ確かに思われるのは、そのような論述の仕方を取ることで、一部の自然科学者はもちろん人文科学的見地からの説明のみでは論を信頼するに足らずとするような読者など、既存の宗教進化論には見向きもしなかったような読者層を本書が引き込むのではないかということである。今日、宗教についての話題は、宗教不要論や創造説-進化論論争に典型的に見られるように原理的な立場の対立や議論の膠着化・放棄を伴いやすいが、そのような現状に対して本書は、衝突しがちな各々

の見地が発展的な議論をしていくための足場を提供しているといえる。宗教学は学際的な性格を有するとされ他の領域との学問的対話が欠かせないが、特に自然科学諸分野とのやりとりにおいて本書は欠かせない一冊となるだろう。

本書は、六百ページ超という分量からも分かる通り、著者の知見を総動員して書かれた宗教進化論である。これは、宗教学に属する者にとってはまず何より往年の大理論の妥当性を再考する良い機会となる。また、宗教理論やその研究に直接関わらない人にとっても、本書は様々な人々と宗教について意見を交わし合う際の基盤として意味がある。このような理由から、本書は宗教学の内外を問わず多くの人に読んで貰いたい一冊である。

註

(1) 宗教進化論の説明については、『宗教学事典』(2010, 丸善)の当該項目を参考とした。

(2) “Religious Evolution” (1964) *American Sociological Review* 29 p.358~79

ここでは『社会変革と宗教倫理』(1973, 未来社, 河合秀和訳)に収録された邦訳版を参照した。